キジル第三区マヤ洞壁画説法図（上）

――ル・コック収集西域壁画調査(2)――

上野アキ

キジル石窟群の第三区第五洞にあたる通称マヤ洞は、第三区に属する八個の石窟のうち最大の規模をもち、第二区のマヤ洞すなわち第二区第十九洞と同構造になり、壁画の主題、内容及び配置がほぼ等しい相似の窟であることはよく知られている。四次にわたるドイツ・トゥルファン探検隊は、この両マヤ洞において多量の壁画の収集作業に携り、大著 Alt Kutscha 及び Die Buddhistische Spätantike in Mittelasien にその主要部分を掲載している。ところが、本誌第三〇八号拙稿「キジル日本人洞の壁画」で言及した事情により、特に第四次の行程での収集品を中心とする多数の壁画がベルリンで登録されぬまま諸外国に散ったこともまたわれわれの関知するところであった。

私は昭和五十一年秋米国各地でこれらの壁画断片に接したが、それらが必ずしも関心を払われていない現状をみて、いささか痛ましい思いにかられた。ここには在米のキジル壁画のうち、第三区マヤ洞の主室側壁の壁画断片を中心に、ベルリン、ギメー及び在日資料についての知見をも加えて報告を行いたいと思うものである。(1)

一

最初に旧ル・コック・コレクションの壁画の現状について述べておきたい。これらはいずれも画面のやつれの甚しい断片で、最小のものは竪九・五糎、横一四・四糎、最大のものでも竪八六糎、横七六糎で、大体において大きなものは少ない。現在米国各地に散在するもののうち、若干のベゼクリク壁画を除いてキジル壁画に限ると、National Collection of Fine Arts, Smithsonian Institution, Washington. D.C.（ワシントン、以下括弧内は略称を示す）に一六点、Metropolitan Museum of Art, New York（メトロポリタン）に一二点、Fogg Art Museum, Harvard University, Cambridge, Mass.（フォッグ）に六点、Nelson Gallery-Atkins Museum, Kansas City（カンサスシティ）に三点、The Detroit Institute of Arts, Detroit（デトロイト）と Museum of Fine Arts, Boston（ボストン）及び米国個人蔵の各一点、計四〇点の存在が確認できる。このほか、日本に二一点、Musée Guimet, Paris（ギメー）に一

一点、Musée d'Art d'Extrême Orient Ferenc Hopp, Budapest（ブダペスト）に二点の所在が判明し、なお Eumorfopoulos Collection に二点の記載例があるので、[2] 総数は七〇点を越えている。しかしそれらがドイツから離れた全体数の半ばにも満たないであろうことは次の理由から推察できる。

すなわち、これら壁画断片は、裏打ちの石膏に施された鉛筆もしくは彫り書きによる覚え書が、第何回探検、キジル石窟、窟寺名、壁面等を物語るが、このうちキジルを Qieszil 又は Quieszil とあらわす二通り[3]のものがある。前者の場合は共通する一連番号が附されており、私の目にしたものについても、一番の青洞（東京個人蔵）から八五番の第二区マヤ洞（フォッグ蔵）まで、途切れがちながら三四点を拾うことができ、その編号も、青洞、小渓谷後第二洞、同前第三洞、同後第四洞、竜洞、第三区マヤ洞、第二区マヤ洞と、それぞれ纏めて順序を追っている。この種のものは、日本、フォッグ、メトロポリタンの一部、ブダペストにあり、ブダペストの一九一八年一月が最も早い年代を示すが、恐らく最初に手放した段階で整理が行届いていたものと思われる。ところが Quieszil と記す後者の場合、一連番号（別表裏書の欄末尾番号参照）はなく、数の見当は全くつかない。その時期も確証はなく、もはや一連番号をうつ余裕もなく、迫り来る物価の高騰と戦った混乱が偲ばれる思いがする。従って前者に於て少くも五〇余り、後者では恐らく更に多数の壁画が今もどこかに存在することが予想されるので、これを機会に新しい資料の提供を切望する次第である。

ル・コック・コレクションのドイツ以外における資料の一覧を一四、五頁に表記した。当初は在米資料に限ることを考えたが、一応判明する限りを記載し、現状報告とするものである。

二

キジル第二区、第三区のマヤ洞は、共に前室を備えた長方形の窟で、主室の奥寄りの壁体で、側廊と奥廊を構成するという、キジル最盛期の石窟形式に属する（挿図1）。かつて故熊谷宣夫博士は「キジル第三区マヤ洞将来の壁画――主として徒盧那像及び分舎利図について――」と題して本誌一七二号（昭和二八年）に論考を発表された。これは現在東京国立博物館に所蔵される大谷探検隊将来ドルナ像がキジル第三区マヤ洞の分舎利図の中央部分に原在したことを証明され、あわせて分舎利図の展開にふれて、この第三区マヤ洞をキジルにおける究極に位置せしめられたものであった。この分舎利図は第三区マヤ洞の右側廊内壁に画かれ、同外壁の第一結集、左側廊外壁の仏菩薩図、奥室内壁の荼毘図の各全画面及び左側廊内壁アジャセ王故事の断片とともに、ル・コックが収集し、ベルリンに齎したが、大戦の結果荼毘図の大画面とアジャセ王故事の断片を除いて殆んど失われ、そのほかはごく一部の断片をのこすのみとなっている。

ところでこの第三区マヤ洞の壁画の当初の状況については、天井画を含めて Kultstätten に非常に精細な記述があるが、側廊及び奥廊の大画面の将来があったにも拘らず、主室の壁画の収集については、Spätantike 第七巻の総目録によっても、僅か二点が認められるに過ぎない。ギメーの一点及び東京某家の一点はこの欠を補うものであったが、

旧ル・コックコレションキジル壁画断片一覧（未定稿）

（fig. 14 以降は本誌 313 号に掲載）

所在		各機関番号	内容	寸法	裏書（数字は裏書番号）	原所在	参考
National Collection of Fine Arts,	(1)	1929. 325. 1	2比丘	24. 2×36. 5	II		
Smithsonian Institution	(2)	〃 2	竜王及2竜女	53. 3×35. 2	(III マヤ洞)	d1-bcd	Pl. IVa
〃	(3)	〃 3	バラモン頭部	35. 5×27. 5	第2小渓谷第3小洞		
〃	(4)	〃 4	5天頭部	22. 3×74. 0	III マヤ洞	d4-qrsgh	Pl. VIa
〃	(5)	〃 5	群像	86. 3×76. 5	〃	d7 右半及 d8 左半	Pl. IVb
〃	(6)	〃 6	3天頭部	14. 5×44. 0	〃	d′I-0, d′II-kl	Pl. VIIc
〃	(7)	〃 7	4天頭部	30. 5×58. 0	〃	d′VI-pghi	fig. 17
〃	(8)	〃 8	上半身裸像	48. 5×30. 0	なし		
〃	(9)	〃 9	5面のバラモン(部分)	27 ×23. 7	(III マヤ洞)	d′III-qh	Pl. VIIb
〃	(10)	〃 10	跪坐の裸像	46. 3×30. 5	なし		
〃	(11)	〃 11	5面のバラモン(部分)	24 ×20. 8	III マヤ洞	d′III-rq	Pl. VIIa
〃	(12)	〃 12	老苦行者	15. 5×14. 0	〃	天井 d′-11	fig. 22
〃	(13)	〃 13	2天坐像	64 ×66	II マヤ洞		
〃	(14)	〃 14	裸像部分	38. 0×21. 5	なし		
〃	(15)	〃 15	3比丘	58. 0×29. 3	III マヤ洞	d2-mno	Pl. Va
〃	(16)	〃 16	飛天	21. 2×23	〃	d3-i	fig. 5
Metropolitan Museum of Art, New York	(1)	42. 49	比丘立像	64. 8×33. 0	像洞		
〃	(2)	44. 77. 1	天頭部	15. 2×17. 1	小渓谷前第3洞 33		
〃	(3)	〃 2	天頭部	12. 1×12. 1	小渓谷後第2洞 16		
〃	(4)	47. 18. 27	天部坐像	49. 2×29. 2	小渓谷第2洞（日本人洞）		308号 Pl. III
〃	(5)	〃 61	天頭部	13. 0×13. 3	小渓谷後第2洞 23		
〃	(6)	51. 94. 1	武人小立像	23. 5×13. 7	青(合唱)洞 2		
〃	(7)	〃 2	天頭部	32. 4×23. 8	小渓谷左第4洞 38		
〃	(8)	〃 3	男子小立像	25. 1×13. 7	青(合唱)洞 3		
〃	(9)	〃 4	3天頭部	22. 2×40. 0	III マヤ洞		fig. 23
〃	(10)	〃 5	2天	41. 6×24. 8	(小渓谷前第3洞)		
〃	(11)	〃 6	3天頭部	24. 1×39. 0	III マヤ洞	d′IV-pfg	fig. 13a
〃	(12)	〃 7	3比丘	23. 2×26. 7	(III マヤ洞)		fig. 28
Fogg Art Museum, Harvard University, Cambridge, Mass.	(1)	1926. 2	天部	36 ×35. 6	小渓谷第2洞（日本人洞）		308号 Pl. II
〃	(2)	1926. 3. 1	天頭部(老)	17. 9×14. 4	(III マヤ洞 54)	d′V-e	fig. 15a
〃	(3)	〃 2	天頭部	19. 3×13. 3	小渓谷(前)第3洞36		
〃	(4)	〃 3	デモン頭部	18. 8×16. 2	III マヤ洞 64	d′V-d	fig. 14a
〃	(5)	〃 4	天頭部(老)	20. 4×15. 3	(II マヤ洞 85)	f′6	fig. 15b
〃	(6)	〃 5	比丘頭部	24. 3×19	なし		
Nelson Gallery-Atkins Museum, Kansas City.	(1)	49. 23. 1	比丘頭部	15. 1×18. 6	(小渓谷後第2洞)13		
〃	(2)	〃 2	頭部	23. 1×20. 3	?		
〃	(3)	〃 3	4頭部	21. 6×45. 5	III マヤ洞	d3-dlm d4-m	Pl. VIc
The Detroit Institute of Arts, Detroit		28. 67	4天頭部	22. 8×48. 2	〃	d8-nopq	Pl. VIb
Museum of Fine Arts, Boston		23. 253	3頭部	16. 9×33. 1	(III マヤ洞)	d′II-bcd	fig. 9
Private, U.S.A.				21. 2×14. 6	藻井洞		
Musée Guimet, Paris	(1)	17. 807	2天頭部		(ル・コック寄贈)		
〃	(2)	18. 255	2天頭部	20 ×27	III マヤ洞		fig. 20
〃	(3)	19. 043	2頭部		〃		
〃	(4)	〃 044	2頭部		(II)マヤ洞		
〃	(5)	〃 045	3頭部		III マヤ洞		
〃	(6)	〃 046	右手をあげる比丘	29 ×20	〃	c 下段 b	fig. 19

Musée Guimet, Paris	(7)	19.047	5頭部	36 ×28	IIマヤ洞			
〃	(8)	〃 048	3比丘	36 ×28	IIIマヤ洞		b′IV-klm	fig. 12
〃	(9)	〃 049	2天頭部	29 ×34	IIマヤ洞		f′6	
〃	(10)	〃 051	ガルダとデモン	29 ×26	(IIIマヤ洞)		b′V-on	fig. 16
〃	(11)	〃 053	老比丘	18 ×14	IIIマヤ洞			fig. 27
Francis Hopp Museum of Eastern Asiatic Arts, Budapest	(1)		天頭部	13 ×14	IIIマヤ洞	56	d′III-n	fig. 11
〃	(2)		天頭部	16 ×12	IIマヤ洞	83		
Eumorfopoulos Collection	(1)		バラモン頭部	21.6×21.6	不明			
〃	(2)		2天頭部	19.7×30.5	不明			
Private, Tokyo	(1)		天部	22.3×13.8	青(合唱)洞	1		
〃	(2)		天頭部	17.5×16.5	小渓谷後第2洞	5		
〃	(3)		天頭部	18.3×13.6	〃	10		
〃	(4)		天頭部	19.8×13.5	〃	11		
〃	(5)		比丘頭部	13.5×14.3	〃	14		
〃	(6)		天頭部	13.3×13.5	〃	15		
〃	(7)		天頭部	9.5×14.4	〃	19		
〃	(8)		天頭部	15.5×14	〃	20		
〃	(9)		3天頭部	15.3×40	小渓谷前第3洞	31		
〃	(10)		バラモン頭部	13.4×15.5	〃	34		
〃	(11)		天頭部	11.8×15	〃	35		
〃	(12)		竜王頭部	14 ×11.6	竜洞	44		
〃	(13)		竜王	16.5×10.4	〃	46		
〃	(14)		天頭部	16.7×12.5	IIIマヤ洞	50	d′I-e	fig. 8
〃	(15)		天頭部	15 ×11.7	〃	57		fig. 24
〃	(16)		2頭部	11.8×20.7	〃	68		fig. 25
〃	(17)		2頭部	15.5×19.0	〃	73	d′VIII-kg	fig. 18
〃	(18)		天頭部	15 ×12	IIマヤ洞	80		
〃	(19)		天部	26 ×18	〃	84		
〃	(20)		天部	26.3×18.8	小渓谷第2洞（日本人洞）			308号 Pl.I
Private, Osaka			頭部	14.5×11.5	IIIマヤ洞	62		fig. 26

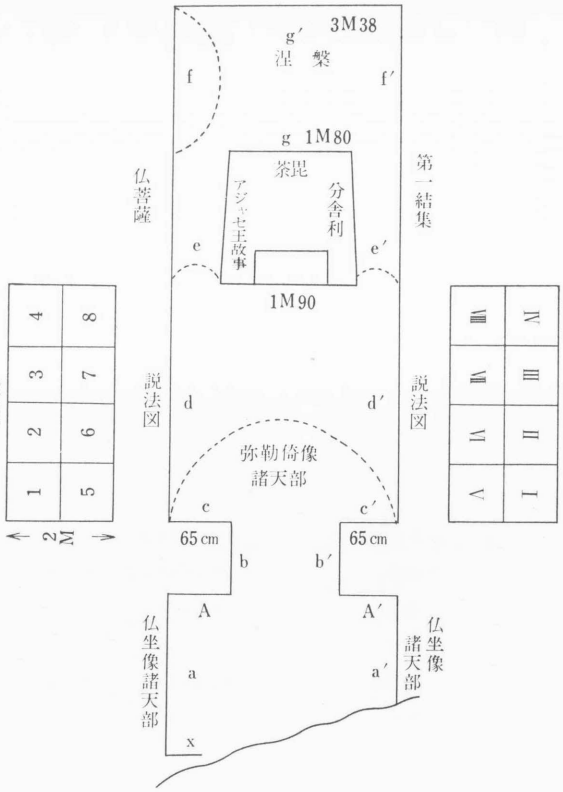
これまで知られていた断片類は殆んどが単独の頭部であったため、その他の壁面の構成については、殆んど手をつかねる状態だったといえる。私は今回在米のル・コック・コレクションを調査中、特にワシントンの壁画に、第三区最大洞との裏書のある断片が多数を占めることに注目し、漸くこの壁画への関心を呼醒まされたのであった。

すなわち、ワシントンでは一六点のキジル壁画のうち、第三区最大洞の裏書のあるものが八点あり、裏書はないが同洞と確認できるものが二点ある。またメトロポリタンに三点、フォッグに二点、ボストン、カンサスシティ、デトロイトに各一点あり、このほかギメーに七点、ブダペストに一点、日本に五点の存在が認められるので、キジル第三区最大洞すなわち第三区マヤ洞の壁画断片は計三一点を数えることになる。

これらの断片に共通する特色は、美しい青色が随所に用いられていること、上部あるいは下部に青い縁のある白い帯状の部分をもつものの多いこと、また描線が柔軟で、第二区マヤ洞にみるような完成した、緊勁な線ではなく、くまどりのきつくないおだやかな顔貌表現をとるという点である。

キジル第三区マヤ洞に於て、これらの断片の原在した箇所を求めると、側廊及び後廊の大画面及び前室右

壁等のこれまで発表されている壁面を除けば、当然主室側壁と天井画以外に余地がないことになる。それで幸いにもこの側壁のくわしい記述をのこす Kultstätten を参照した結果、大多数のものについて、ほぼその原所在箇所を確認することができた。本稿では第三区マヤ洞の主室側壁の説法図について、図様の概要を述べると共にル・コックコレクションの断片の比定を行い、兼ねてキジルにおける説法図の展開を試みたい。



挿図1　キジル第3区　マヤ洞　見取図

三

第三区マヤ洞の主室側壁は、幅三米七〇糎、高さはほぼ二米の壁面に、左右壁とも、坐仏を中心とする各四個の主題の説法図が上下二段に、計八個ずつ画かれ、各主題間に横の区劃は無く、上下の段を青い縁のある白い帯状の部分で区切り、壁面の上端と下端にもこれが画かれていたらしい。

説法図は、中心の仏と、これを囲む十数体の眷属を三、四段に配する構成になり、立像、坐像の相違はあるが、一応上方では視線を下に、下方には上を見上げるものが多いという原則のもとに比定を行っている。一主題間では特に後向きを明記しない限り、概ね仏に向いていると考えておく。

左右壁とも入口に近い方から、左壁はアラビヤ数字、右壁はローマ数字により、上段を一から四、下段を五から八と主題番号をうち、その図様を Kultstätten は次のように説明する。

左壁（d） 入口に近い上段は破壊がひどい。

第1主題

←
d b c a　e f

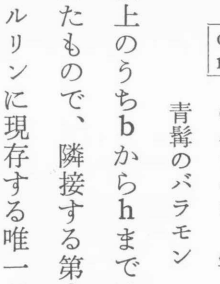
aは仏陀、右方を向く、bは二竜女cdを従える竜王、正面向きで、殆んど裸の暗い身色に、うすい衣をつける（挿図379参照）dは竜女（挿図402）頭飾の上に殆んど剝落しているが蛇状のもの、eは執金剛神、fは白い天部（挿図403）残欠。

ここにいう挿図379はキジル第二区マヤ洞[4]の左壁第V主題の竜王と二竜女の立像のスケッチ（挿図2）で、三者の頭上にもりあがる鱗状のものが明瞭に画かれる。これによって第三区マヤ洞第一主題のbcdも立像であることが判明し、dを図示した挿図402（挿図3）がワシントン(2)（図版IVa）の左端頭部に適合すると認められるので、この図には裏書はないがこの竜王二竜女図と比定できる。[5] このd像には現在、解説にいう頭上の蛇状のものは残っていないが、額と耳の脇で切揃えた青い髪と印象的な眼のくまどりがそれを物語る。胴は破損して欠けるが、交叉させた足に鮮やかな青い布を纏っている。竜王は上半身は裸身で褐色の布で腰を

捲き、うすものを纏ったような淡青の平行曲線でつま先だって交叉させた脚部を蔽っている。向って右の竜女は、体軀は殆んど失われ、暗色の肌に濃いくまと白いハイライトを施した顔と、膝と足先を僅かにのこしている。左足で立って右は遊脚とし、膝頭を西域の壁画で屢々見られるように楕円形に白く抜いているのは興味深い。

第1主題fは挿図にみえるが該当の図は無く、相隣る第2主題のワシントンの断片の左端に、左足先と、青いひれ状のものを見せる。

第2主題



a仏陀左向き、b地面に身を投げるバラモン、cd老バラモンと女性バラモン抱擁（挿図374参照）e奇妙な髪形で大きな耳飾りをつけたバラモン風の者が仏を礼拝、手を額にあてる。f有髯の苦行者、刀をもつ、その後に仏弟子g、h青い刀をもつ苦行者、i執金剛、kl飛天、m有髯のバラモン、坐って両手で顎を支える、n仏弟子、刀をもつ、o禿頭の青髯のバラモン

以上のうちbからhまではかつてSpätantike第七巻図版18bに掲載されたもので、隣接する第3主題の三像を含めて、主室側壁の壁画としてベルリンに現存する唯一のものである。前記図版にカットされた部分を含む全画面の写真を請うて、図版Vbに掲げ得たことは喜びに堪えない。この画面ではKultstätten挿図374の第二区マヤ洞右壁第4主題の抱擁するバラモンと位置が左右逆にあらわされる。eの山伏のような頭が印象的であり、つま先を揃えて立つのも足先を交叉させることの多いキジルでは珍しい。仏の前に倒地するbは足先だけが見えている。

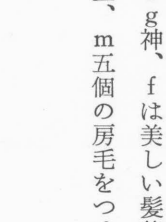
仏を挟んでmnoにはワシントンの(15)[6]（図版Va）が適合する。すなわち白髪白髯で、三重にターバンを捲き、白いふちどりのある青い腰布、細い緑色のひれを纏い、腰かけて頬杖をつく老苦行者m、茶色の髪、耳輪をつけ、左手を前方に伸し、右手に細い刀をもつ若い仏弟子nに、ふり返るバラモンoは後頭部から頬、口の周囲を青い髪髯でつつむ。右手は胸前に揚げ、左手は掌を外側に向ける。画面の下段の白い帯は、下段との境を示す。

なおこの断片には、裏書に

IV Reise, M.Ö. Quieszil, III Anl. grö. Höhle, Forhalle

と記され、前室とするが、他にもその例があるように、主室を奥廊の前室とみた誤りと思われ[7]、ここに該当することは明らかなので、訂正しておきたい。

第3主題



a仏陀倚坐、右向き、b跪坐する青衣の仏、c鎧装白帽の執金剛神、d跪坐し祈る婦人、efg神、fは美しい髪飾(挿図404)、hi天部、k痩せた老比丘、l老比丘、m五個の房毛をつける若者、n若い比丘、o天

cfgは第2主題の右半に続けて図版Vbの画面に含まれる。特に美しい髪飾として挿図に示すf（挿図4）が右端に見え、bの跪坐する仏の頭光が窺える。

ここの画面の中で最も特異な「五個の房毛をつける若者」がカンサスシティの断片[8]（図版VIc）に含まれる。すなわち大きな耳飾をつける横顔の若者の頭部には根もとをリボンで捲いた小さな髻が現在四個見える。前頭部に剝落があるので、更に一個の余地は充分あり、このmに間違いないと推定できる。従って、四者を含むこの断片の左端はdに相当し、

美しい花飾りをのせ、頭光があるので婦人とするよりは菩薩か天部とすべきもので、合掌した姿だったと思われる。第二番目の像は頭が全部欠けているが、頬に皺がよっているので1老比丘と見做される。右端は隣接第4主題のmにあたる。この断片は、これまでの三例と異り、他の多くの例と同様、胸

挿図4　d3. f　描起し
Kultst. 404

挿図3　第3区マヤ洞d1. d竜女描起し，
Kultst. 402

挿図2　第2区マヤ洞　竜王童女　描起し，　Kultst. 379

以下を捨てて頭部のみの収集を行っている。この裏書には

IV Reise, M.Ö. Quieszil, III Anlg. gröste Höhle

という、ワシントンのものと一連の形式がみられる。

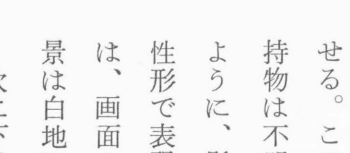
またワシントンの、左手をあげ、体を斜めに構えた明かに飛天の形をとる(16)（挿図5）は、この主題の上段に該当すると思われる。ゲベートミューレン洞に、左壁第二主題の上部jとする四頭のバラモンが飛翔する

挿図6　d4. s　描起し
Kultst. 405

姿があり、(9) 右方の上段を一体だけで占めている点がここでのoと対比されるが、顔の向きと、やや上体をおこした形がゲベートミューレン洞の場合と異るため、配置に余裕をもたせたiにあてるのを適当とする。

第4主題

挿図5　d3. i　断片　National Collection of Fine Arts, Smiths onian Institution



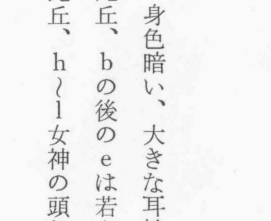
a仏陀、左向き、頭上左方に跪坐する仏を置く。cd二比丘、e〜i五天部、ghi女性形、gチャンドラをもつ、k仏、錫杖と鉢をもつ、その前に若者、lm二神、前方は青く後方は白い、n若い神、女神を抱え、あごに手をかけて愛撫、p有髯の執金剛、qrs天部、qsは明かに女性、sは挿図405。

後方白い神とする左端のmは第3主題カンサスシティの断片、右端の合掌する菩薩である。

挿図405によって示されるS（挿図6）をワシントン(4)（図版VIa）の中央に見出すことができる。この挿図は後出する(7)の左端の天部にも近似するが、白点をつけた茶色のリボンが長く垂れて内側にカーブする曲線と、上方にやや離れてもう一条の白点のある青いリボンとの間隔も頭上の花冠やその脇にのこる飾りの一部も、(7)よりもこの(4)との一致を思わせる。このsは合掌し、gは左掌を外に向け、右手は指先がみえるが、持物は不明、両肩の後にかかる長い青いひれが印象的である。またrのように、髪を長く垂さず高く結いあげている形をグリュンウェデルは男性形で表現していることは、他の部分の比定の上で参考になる。上部には、画面の上端を示す白い帯が、青いヘリをつけて鮮やかに画かれ、背景は白地に黒い花文を散らしたものだったことが判明する。

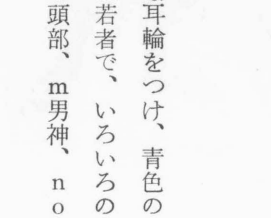
次に下段に移り、同じく戸口側から

第5主題



a仏陀左向き、b若いバラモン、身色暗い、大きな耳輪をつけ、青色の捲毛、c女神、d跪く青い衣の比丘、bの後のeは若者で、いろいろのものをのせた皿をもつ、fg二比丘、h〜l女神の頭部、m男神、no p女神の頭部、破壊。

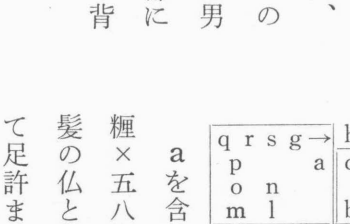
第6主題



a仏陀、右向き、b裸の婦人坐像、c彼女の衣をつけた侍女が傘をもつ、d有髯の老比丘、ef二比丘、gh二女神、gは挿図406、ik二男神、l裸の婦人右向き、背後のmは暗色の侍女、n跪坐する娘、供物を差出す、o扇をもつ侍女、p婦人、qrs三男神、

以上の二つの主題については該当する断片を見出さない。ワシントンに裏書きのない裸像の断片が二つあり、(10)は足もとに白い帯がある跪坐像で、(15)は右を向く半身で形は適当であるが寸法が他のものに比べて大きく、色の調子やくまどりがこの洞とやや異質な面も考慮して、ここには省くこととした。

第7主題



a仏陀、左向き、b裸の女性背後の仏に振向いて踊る、c青い長髪の暗色の若者、持鉢、bc挿図407、de二比丘、f老女（eの母か?）gh ik qrs男神、k挿図408、l赤い縮毛の暗色の若者、彼の背後に同様に坐る白い若者が見える、n濃い青で三眼の執金剛神、op比丘、

aを含む左半が戦前ベルリンにあり、一B九一八八と編号される五七糎×五八糎の断片であった。Spätantike 第七巻総目録の解説で、青い髪の仏と眷属の九個の頭部とするもので、六〇糎に満たない寸法から見て足許まで含まないと思われるから、上端から前列lmの顔までの頭部ばかりであったろうが、この断片は第二次大戦で失われている。この第三区マヤ洞の側壁中に中尊の将来はほかに無く、これが唯一の例だっただけに、図版にも載らず、写真も残さなかったことは惜しまれる。

挿図407（挿図7）によってワシントンの(5)（図版IVb）が第7、第8主題に属することが判明する。すなわち裸身の女性bが身体をねじって、

左手を腰に、右手は左上方にあげて踊り、足先を交叉させて振向いて居り、脇に鼠色の体に青い裳をつけ、緑の領巾をかけて青い鉢をもつ、青い長髪の若者cが立つ。dの頭は褐色、eの頭は青く、fは顔から足まで赤茶色、白髪である。この断片の右半分は第8主題の左半に続く。

第8主題

```
                n o p q
f g h ←|        a k l m
e d|              i
c b|
```

a仏陀、右向き、倚像、b痩せた有髯の比丘、白身、つぎはぎの衣を着て仏に向って跪く(合掌)、c同様の者が後に錫杖をもって立つ、d暗色の神、合掌、e老いた青身白髪の傘もち、fgh女神、i執金剛、栗色のサンタ、klm三比丘、noq女神、p男神

このbcdeがワシントン(5)の右半にあたり、画面にはdの斜右上に耳飾りのある頭部に眼だけをのこす顔がみえるが、説明はこれに言及していない。この断片は裏書に

IV Reise M.Ö. Quieszil, III Anlge gröste lange Rechte Seitenwand

とあるが、この図の左壁であることは間違いのないところである。

挿図7　d7, bc　描起し
Kultst. 407

なお同じく裏書に前室、右側壁を明記する四天の類部がデトロイトにある(10)(図版VIb)。これまでのように、この図も左壁にあてるとすれば、この主題のnopqにあてるのを最も適当とする。解説によれば左端の仏を覗き込むものが髪を茶色とするほかは髪を白いままとし、肌は左二を暖いグレイ、右二をスレート・グレイとする。左端を男性形で表現しているが、耳の脇にも髪を画き、リボンを垂しているので、女性形とみたKultstättenの記事は右壁第III主題のrとも共通して肯定できる。

右壁(d′)

左壁同様入口に近い方から上段I〜IV、下段V〜VIIIの主題が画かれるが、配列は右から左で左壁と逆になる。

第I主題

```
m g|e|
l f d
k c b
  → a
j
i p
h q  |o|n
```

a仏陀、左向き、b倒れて手を差伸べる王、c子供、d白い祈る男神坐像、e暗色の祈る女神坐像、fg二比丘、klm三神、m女性、n禿頭で赤髯の執金剛、oバラモン風の仏弟子、p神、破壊、q傘もち、h暗色の神振返る、ij白象にのるインドラとパクロミ

この主題ではeが、東京の断片(14)(挿図8)にあたると考えられる。鼠色の顔にうすい褐色のくまと白いハイライトを施したこの小像は、やや仰向いて、胸前で合掌する手の甲の鼠色と、白色の掌が見える。顔の前方に、青い縁、緑の地に白い花弁のような装飾が見えるので、併列する光背をもつ像があったことを思わせる。

この図は周囲を黒く塗り、ガラス入の額装になり、額の裏板に

IV Reise Qieszil, III Anlage gröste Höhle, G. Nr. 50

とあり、その後の改修の手を加えていない状況を示す。

またのワシントン(6)の断片の右端がoに該当すると思われる。白い顔

にくまどりがあり、額の中央で分けた青い頭髪を巾広いリボンで束ね、更に上に青く拡っているが、これが頭髪の一部かどうか確認できない。心もち仰向く姿でこの位置にある可能性を物語る。

第II主題

r o
p q n
m l
a
k
c b d
g f e h i

a仏陀、左向き、bc白い男神、白い女神坐像、d暗色の髪の青い傘もち、ef若者と女神、eは長くのびた髪（挿図409）、gi女神、h男神、k跪く三眼の男神、仏陀に矢を差出す、背後に白い女神、mno三比丘、pr神、q女神

隣接の第I主題のoに続く、第II主題klをワシントン(6)（図版VIIc）にあてたい。すなわち左はk、三眼と記すもので、画面で非常に印象的な第三の眼が、このように明かに画かれた例が現存の断片では他に見られず（カンサスシティの左端のように飾りとみえるものを除いて）、又解説中に三眼を明記するものはほかに二箇所あるが、一つは左壁第7主題の旧ベルリン所蔵品中にあり、他は右壁第V主題中に褐色の神とあるもので、横に青髯のものが来ることからも適当ではない。従ってこの断片はこのklに該当すると見るのを妥当とするものである。kは青い髪に褐色のリボンが見える。中央のlは髪が白く褐色のリボンをかけているが、耳の脇に黒い髪の一部と、更にその外側に緑色の長い領巾と思われるものが覗くので女性形とみてよいであろう。

この図はワシントン(4)（左壁第4主題）の右から二番目の頭部に近い。ただ疑問ののこるのは左端に僧衣と覚しい緑色地に白と黒の線を入れる破片の問題で、第三区のマヤ洞の糞掃衣はすべて短冊形をはりあわせた形（図版IVb参照）に成るので、この場合いささか異質だが、背後の比丘

挿図8　d'I. e断片
東京　個人蔵

挿図9　d'II. bcd 断片　Museum of Fine Arts, Boston

挿図10　d′Ⅲ. q 5面のバラモン　復原

挿図11　d′III. n断片
Francis Hopp Museum of Eastern Art, Budapest

形が三体あり、前列のｋｌが二体である点から、比丘の左端ｍの僧衣と認められれば解決する。この断片には裏書に

IV Reise, M.Ö. Quieszil III Anlg. gröste Höhle.
l Seitenwand

とあって、左壁第８主題同様の左右の誤りと見做される。

又仏の向って左の下段ｂｃｄはボストンの断片[11]（挿図9）と知られる。すなわち中央の斜上方を振り仰ぐ顔は明らかに最下段にあることを示し、青い髪をゆい上げて円盤上の飾を頭上に掲げる形は、背後の茶とリボンを長く垂した女性形の像と対比して、男神とする形をとる。大きな耳飾をつけ、光背も美しい。背後のｃは光背は剝落するが、頭上に青い高い花冠をのせている。右端ｄは白いターバンを捲いた紺色の顔に、赤茶色のくまと白いハイライトをつけ、茶色の髯が頬から頤を蔽う。図柄も主題も、アジャセ洞右壁の第三主題との相似が見られる。このｄの背後に中央仏の光背の一部と思われる太い青い弧線が見られる。

第III主題

s [r q h] i k
p o a e f g
d
[n] m l b c

a仏陀左向き、倚坐、ｂｃ白い神と女神（合掌）坐す、ｄ若者、ｂｃの方に向き傘をもつ、ｅ冠をもつ若者、ｆいろいろの供物を盛った皿をもつ老侍者、ｇ丸い帽子の侍者ｈｋ女神、ｉ神、ｌつぎはぎの衣のバラモン、仏に深く拝礼、ｍ執金剛、サンタは白、ｎ暗色の神坐像、ｏｐ若者二、ｏの上半身にインド式チューダの宝珠をつける、ｑ頭の五箇（！）あるバラモン（クムトラ　挿図38参照）ｒｓ女神、

この主題で Grünwedel が！つきで記す五面のバラモンは中央から二

挿図12　d′IV, klm 断片
Musée Guimet, Paris

つに切ってワシントンの(9)と(11)の二箇の断片に分れている。しかも倉庫内で左上端と右下端に置かれていたため、似通ったこの二図が接続する事には全く気付かなかった。(9)の額縁が多少大きいので、写真にすると両者は大きさを異にするため、一そう困難であった。本文と対比して漸く一画面と認めえたのは大分後のことである。図版Ⅶａｂには比例を同じに掲載し、かつ再生接続させて挿図10とした。五面はいずれも白い顔で頭と髭が青い。目鼻を描く橙褐色の線に中央の頭部のみは眉に青い線を添える。中央像の胸には左肩より斜に青い縁のある緑色の衣をつけ、肩は厚く、右肱を前に曲げている。左端の頭部が中央のものに比して大きいのは意外な感じが強い。Grünwedel が！をつけたように、キジルでも五面の例は稀有だったものらしい。参照とするクムトラの場合は三面であり、Alt Kutscha に Hochliegende Höhle とする小渓谷第三洞には四面の例がある（本誌第三〇八号図版Ⅵｂ参照）。この場面は人数は多少違うが、同様の主題をあらわしているので、全体の配置を考える上の参考になろう。

ｒは茶色の髪、目鼻はかすれて明らかでないが、口の傍に茶色の記入文字がある。胸前に蓮弁様の痕跡がある。ｈは青い髪を茶色のリボンで束ね、頭上に高く飾りがある。そしてこの視線の前方に外側から青、黒と重ねて内区が緑色の仏の頭光が見え、仏の肉髻が青くのこる。

確証はないがｎにブダペストの断片（挿図11）をあてることが考えられる。左側から見上げる像の適当な場所が無い故である。この断片は、ル・コックからハンガリーのタカチ教授に[12]贈られたもので、

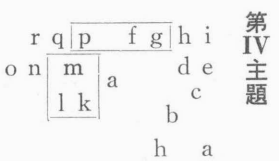
挿図13ａ　d'IV. pfg 断片　Metropolitan Museum of Art, Fletcher Fund, 1951

Herrn v. Takács 2fE Jan. 1918
IV Reise Qieszil,
III Anl. grösste Höhle
g. No. 56

の裏書がある。

挿図13ｂ　同上背面　Le Coq 筆蹟

第Ⅳ主題



ａ仏正面を向く、ｂ羊と車輪、ｃ執金剛、サンタは扇、ｄｅ二比丘、ｆｈ女神、ｇｉ神、ｋｌｍ三比丘、ｎｏ若者、ｐｒ二神、ｓ女神

この主題についての記述は短いが、ｋｌｍの三比丘は位置的にパリの断

片 19.048（挿図12）をあてることが可能である。1の顔の描法に、第三区マヤ洞の他の顔だちと似ない点もあるが、裏書がこの洞を明記して居るので、ここに比定する。またpfgにはメトロポリタン(11)の断片（挿図13a）を想定する。男神像に挾まれた女神像と、仏の上部と見られる配置は、ここを最も適当とするものである。この図の裏面には、彫り書きによる窟名とともに、フランスの考古学者、アッカンに贈ったル・コックの献辞がフランス語で鉛筆書きされている(13)（挿図13b）。

註

1　戦前ベルリン民族学博物館 Berliner Museum für Völkerkunde に収蔵されたドイツ探検隊の収集品は、特に壁画が第二次大戦によって半数余失われたが、現在ベルリンの国立博物館インド美術館 Staatliche Museen Preussischer Kulturbesitz, Museum für Indische Kunst に所蔵され、この地域のものとして今なお最大のコレクションである。失われたものには、ベゼクリク第九号窟寺の誓願図一三点とともに、キジルでは孔雀洞の全部、第二区マヤ洞のアジャセ王故事図、茶毘図、第三区マヤ洞の分舎利図等が含まれ、疎開の手段のなかった大画面のものが多かった。この受難の記録として、
H. Härtel: Über das Schicksal der Turfan Sammlungen, Orientalistische Literaturzeitung, 1957, Nr. 1/2
が詳しい。大画面のものでも財宝洞の全画面、第三区マヤ洞の茶毘図等は残り、比較的被害の少なかった中小画面の壁画と絹絵・紙絵、塑像類を含めて、陳列目録三七七番から五六六番までの陳列品があり、倉庫内にもなお多数納められている。

2　The George Eumorfopoulos Collection, The Chinese, Corea and Seamese Painting, London, 1928. Pl. LXIX, No. 126, Head of Bearded man, No. 127, Two Heads.
この二点の所在は現在全く不明で、本書中の中国朝鮮の絵画が入った大英博物館でも、この断片は所蔵していないようである。

3　なおこのほかに両者のいずれでもなく、M.Ö.Q で表記する、日本人洞のような場合がある。

4　第二区マヤ洞は側廊、奥廊等に第三区マヤ洞と同主題の図を配置しているが、主室側壁の説法図では主題の選択、配置が全然別で、上下段を区切る白い帯状の部分もない。しかし共通する主題については形状などで参考になる点が多く、ただ表現としては、第三区マヤ洞の方にやや素朴な面が窺われる。

5　ワシントン所在の壁画断片は、今回使用したものでは、15を除きナショナル・コレクション・オブ・ファイン・アーツ製作の写真を使用した。現在画面は多少の修理を経ているが、同館の写真は旧状を伝えている点で極めて貴重である。

6　本図の写真はワシントンより送付されなかったので、一九七六年筆者が撮影したスライドからおこした写真を使用した。

7　一九〇六年のグリュンウェデルの記述と、一九一四年現地で収集にあたったバルトス等の記録にくいちがいが生ずるのはやむをえないことだったと思われる。この前室や、のちに屢々出る左右壁の違いなどは、立つ場所と向きによって変ることで、統一があればよいと考えておく。

8　本図は一九五七年 Los Angeles County Museum が主催し、アメリカ、ヨーロッパ及び日本の収蔵家の協力で開催された、「唐代の美術展」に出品された。
"The Arts of the T'ang Dynasty" cat. No. 1, Four Heads of Divinities.

9　Spätantike, Vol. VII, Pl. Ba.

10　註8、Cat. No. 2, Four Heads of Divinities.
なお Bulletin of the Detroit Institute of Arts, Vol. X, Oct. 1928 に "Buddhistic Heads from Kizil" の解説があり、Benjamin March の署名がある。

11　本図は去る昭和五三年、東京、京都、名古屋で開催されたボストン美術館展に「三人の頭部」壁画断片として出品された。ガラスのある額縁に入り、裏板には Hindustan Painting, purchased from Karl H. Hiersemann と登録番号 23,253 を記す。ヒルゼマンについては
Karl W. Hiersemann :Katalog nu. 519, Der Quient unter Einschuss seiner Kunst' Leipzig, 1923. S 73, T. XI.
の文献の所在を註12の論文に注記する。なお本図の裏板の下の石膏部の文字については、IV Reise Qieszil のほか判読しえない旨同館の井口安弘氏の回答を得た。

12　タカチ教授 Prof. Zoltan Takács von Felvinczi はホップ美術館の初代館長。同館の二点のキジル壁画について左の論文に詳細に記される。
László Ferenczy; Zwei Devataköpfe aus den Wandmalereien der Maya-Höhlen in Kyzil. Annuaire du Musée des Arts Décoratifs et du Musée d'Art d'Extrême Orient Ferenc Hopp, Vol. x. Budapest, 1967.

13　この断片の裏書には第三区最大洞と記す彫り書きのほか、鉛筆で四行に記された文字があり、次のように解読できる。
A mon cher ami Hackin son bien dévoué A. Le Coq.
すなわちル・コックからフランスの東洋考古学者ジョゼフ・アッカン博士 Dr. Joseph Hackin (1886—1941) に贈られたものであり、ブダペストのタカチ教授の場合と同様、ル・コックの各国東洋学者との交友が偲ばれる。
この断片は一九四一年アッカン博士夫妻の歿後、盧商会(C.T. Loo & Co.)の手を経て現在メトロポリタンにあるが、この間の事情は不明である。メトロポリタンの裏書については、同館から写真の寄贈を受けた。

因みに挿図13bに一部分見える彫り書は、ベゼクリク石窟の壁面にのこされたバルトスの署名と照合して、彼の筆蹟と推定できる。本誌第三〇八号三頁挿図2に掲げたものがこの種のもので、同挿図3は本号挿図13bと共通する癖があるので恐らくル・コックの手であろう。バルトスは屢々最大洞 größte Höhle を groste Höhle と記す。カンサスシティ(3)、ワシントン(5)、同(4)等上述の諸例もこうなっており、後にsを加筆した大阪個人蔵の場合もある。

なおギメー美術館では近年ギャラリーの改装が進み、永らくギメー美術館に在任されたアッカン博士の記念室も整い、ペリオ収集及びル・コック旧蔵のキジル、クムトラ、ドゥルドゥルアクールの壁画を含む中央アジアの室も一九八〇年春の公開に向けて整備が進んでいる。メトロポリタン美術館のアッカン博士への贈呈分に関連して、ル・コックより寄贈されたものが他にないだろうかと訊ねたところ、ル・コックのギメーへの寄贈分一点が判明し、また後にリブー氏 M. et Mme Jean Riboud より寄贈になった一点もル・コック将来であろうとのことであった。これらについてベザール R. J-Bezard 氏が近刊の La Revue du Louvre et des Musées de France に発表されるとのことであり、後者については今回のリストからも省いたが、他に最近倉庫内より再発見された三点を加え得たのは幸いであった。なお同館のル・コック資料にはクムトラの壁画が六点あり、番号が飛んでいるのはこれらを抜いたためである。

〔補〕 一四、一五頁の一覧表について一言しておく。

寸法欄のうち、ワシントン、フォッグでは額縁の内側で計測、日本のものは竪横の最大値を示し、そのほかは所蔵者側の計測に従っている。

裏書欄に括弧をつけたものは、裏書はないがその洞に比定できるもの、なおⅢマヤ洞とするものは、裏書には第三区最大洞と記されている。